

## 行政視察報告書

委員会名(会派名)	新風みらい	報告者	中山 眞二、堀 勝重、山崎 雅男、田澤 信行
視察日程	令和 1年 7月 23日 ~ 7月 25日		
調査事項及び視察地	① 北海道小樽市 「小樽まちづくりエントリー制度」について ② 北海道滝川市 「たきかわ菜の花まつり」について ③ 北海道美唄市 「グリーン・ルネサンス事業」について ④ 北海道千歳市 「防災学習交流センター そなえーる」について		
参加議員(委員)	中山 眞二、堀 勝重、大岩 勉、山崎 雅男、田澤 信行		
<p><b>【調査目的・内容】</b></p> <p>審議会等においては、市民公募委員の参画が図られているが、ほとんど同じ委員であり、ともするといつも同じ当て職的な委員が多い。そんな中、市政に参加経験のない市民を含め、広く平等に市政に参加できることを目的に、従来の方式を補填するものとして市民公募委員登録制度がある「小樽まちづくりエントリー制度」を実施している小樽市を訪ねた。</p> <p>「制度概要」</p> <p>①住民基本台帳から無作為に抽出した市民を対象に、審議会等への市民公募委員として参加可否(参加の場合、併せて希望動機等)について確認する。</p> <p>②参加可とした市民をあらかじめ市民公募委員候補者名簿に登録する。</p> <p>③担当課(審議会等の所管)が市民公募委員の参画を必要とする際(新たに審議会を設置、または改選)、候補者名簿に登録した市民へ参画の意向を確認し、承諾を得た場合、選任する。</p>			
<p><b>【所感】</b></p> <p>① そもそも審議会というと、市民の声を聞いたという、アリバイ作りのところがあることは以前から感じており、審議会のメンバーも自治会の代表、産業界の代表、教育界の代表ということで、それぞれの会の会長が出席していることが多い。また、一般市民から構成される公募委員も同じ人ができることも多く、誰もでてくれないので、役所のほうからお願いしたような人ばかりであることが多い。従って、同じメンバーが審議会を構成していて、形骸化している面もあると感じる。</p> <p>そんな中、小樽市で行われていた、市民公募委員の登録制度は興味深いものであった。18才以上の市民の中から2000人を無作為に選んでこの制度への登録案内を郵送して同意書を回収する。同意してくれる市民は100人程度だが、今までにない新しい意見が聞けることや、市制に新たに参加してくれ市民が増えること、また、行政側も緊張感を持って、審議会に臨んでいくなどメリットは大きい。</p> <p>小樽市での担当課の説明は、資料がしっかりしていてわかりやすく、また、事業の実施についての検証もきちんとしており、質問をする余地がないほどであった。担当の方とのお互いのまちの情報交換や本音での意見交換は、有意義なものであった。</p>			

## 【調査目的・内容】

○視察事項：「たきかわ菜の花まつりについて

滝川市でのナタネ栽培は、平成元年・2年度に行われた現在の「北海道中央農業試験場遺伝資源部」での適応試験の実施がきっかけであった。

研究機関での適応試験とともに、滝川市でも試験が実施され、東北農業試験場で開発された、秋まきの無エルシン酸品種「キザキノナタネ」が北海道の優良品種として選定されたことを契機に、滝川地域でナタネ栽培が普及し、平成11年頃から栽培面積が拡大してきた。その後、菜の花の作付面積は、平成19年度から25年度まで7年連続日本一となり、平成26年度は播種時期の長雨の影響により、日本一から退いた。平成27年度からは再び日本一となったが、令和元年は美唄市が1位、滝川市が2位になったとのこと。いずれにしても滝川市は全国で常に上位の作付けを行っている。

その「菜の花」を活用して、「菜の花」は景観作物として非常に有効な作物であり、滝川の農村地帯一面に広がる菜の花畑は、5月中旬から下旬頃に見頃を迎える。

開花時期にナタネ生産者、JA、観光協会、市役所などが中心となって開催する菜の花まつりは、令和元年度20回目を迎え、テレビや新聞など各メディアに取り上げられることが多くなってきている。年々増加する観光客に対してこれまで以上に「おもてなし」を図るため、当初は1日限りだったおまつりを、2日間開催にしたことに加え、菜の花畑会場のほかにグルメ・イベント会場を設けるとともに、近年はロングランで行う「菜の花ウィーク」を同時期に規模を拡大している。

●まつり開催期間中に、「菜の花タクシー」を運行し、花畑の最高ビューポイントを運転手の解説付きで巡る役時間のツアーが観光客に人気。 1,000円/1人 利用者数：129人

② ●「菜の花フライト」も実施。滝川市の観光資源の1つであるグライダー。菜の花の開花シーズンは「菜の花フライト」と称し、上空500mから広大な菜の花畑を鑑賞できる観光体験飛行を実施している。料金8,500円/大人1人

●グルメ・イベント会場では、市内の地産地消認定店をはじめとした飲食店が出店。滝川市の特産品である味付きジンギスカンを食べ比べできる「ジンギスカンDON! フェスタ」を同時開催。(地元ジンギスマーカー5店の肉を丼で提供)

●民間企業との連携。菜の花まつりポスター掲示によるイベントPR(全道1,100店舗送付)

●菜の花関連の特産品 なたね油、菜の花オニオンソース、菜の花オイルソース、なばな菜の花スイーツ等

○2019 たきかわ菜の花まつり来場者数と経済効果

【来場者数】

◆菜の花畑会場：期間5月16日～19日 ◆グルメ・イベント会場 期間5月18日～19日

来場者合計：10万人

【経済効果】平成30年度の推計値

76,853千円

※観光客の多くは通過型観光は札幌・旭川からの日帰り客と考えられ、観光消費額の大半は飲食費であり、宿泊費の消費は少ないとのこと。

【所感】

集客できるそのまち特有の資源を活用、民間企業と連携し、現在実施しているイベント・まつり・事業等・食文化等と繋いでいくことで、経済効果もおおいに期待できる新しい事業の展開ができるのではないかと。

**【調査目的・内容】**

「グリーン・ルネサンス事業」の「グリーン」とは、「農」・「食」・「みどり」・「若芽」・「青年」等を指し、「ルネサンス」は、再生を指し農業や食を通して地域再生をしようとする取り組みを指す事業。本事業を通じ、子どもたちが「生きる力」を育む取組について調査を行った。

**【所感】**

美唄市は、かつて炭鉱のまちとして栄えピーク時では（昭和31年4月）9万2150人で、今では（平成31年3月末）2万1390人の市である。

③ 少子高齢化、人口減少、情報化の進展、食生活の乱れ、不登校・ひきこもり等から生じる閉塞感、希薄な人間関係等の厳しい環境を切り拓くには、「教育力」を高めることが必要であるとして農業体験学習を始める。農業体験学習を通して、コミュニケーション能力、情報活用能力、思考力・表現力、そしてそれらを活用する能力という「生きる」を育む4つの能力を醸成し、農業を通して地域を再生し、郷土愛を育むことで、子どもたちの将来に向けての定住・回帰を目指し、人口減少対策として取り組まれている。

美唄市は、農業・自然・文化および地域の人たちの知恵など豊富な資源を有効に活用し、農業の大切さや役割、素晴らしさを幼稚園から高校生まで全市的に農業体験を通して、「生きる力」や「食育」を学ぶことで、地域の絆を醸成するといった人間教育を推進している。

調査の際は、燕市においても、大変参考になる事例であると感じた。

**【調査目的・内容】**

千歳市では、自衛隊施設が市街地の三方を取り囲んでいるが、一部の施設近隣住民から騒音・振動による被害などが寄せられていたことから、千歳市では課題解決を図るため、道路整備や緩衝地帯の整備などを盛り込んだ「経路対策の基本方針」を定め、沿線地域の環境改善に努めていたが、地域からは更なる改善が要望されていた。

このような状況下で、国の防衛施設周辺地域の発展を推進するための補助制度を活用し、住民要望や住民懇話会での議論を踏まえて「防災学習交流施設そなえーる」を平成22年4月24日にオープンしている。

「防災学習交流施設そなえーる」を視察することで、市民に対して防災意識をどのように高めているのかを目的に千歳市を訪ねた。

④

**【所感】**

そなえーるの施設は7つのコーナーに分かれており、実際の災害時の画像や地震体験、煙避難体験など、災害時の避難行動の困難さなどを体験することができた。特に、地震体験では、東日本大震災時や熊本地震の再現（揺れの波）を経験でき、本当の恐ろしさを感じることができた。

<7つのコーナー>

①災害学習コーナー ②地震体験コーナー ③通報体験コーナー ④予防実験コーナー

⑤防災情報検索コーナー ⑥煙避難体験コーナー ⑦避難器具体験コーナー

燕市でも防災意識を高めるための啓蒙活動を推進し、特に子供たちが体験できるような環境作りを更に検討する必要がある。

【視察の様子】

①小樽市



②、③滝川市、美唄市



④千歳市

